

子どもたちに平和な未来を！

2.11 子どもと教育を守る北海道集会 アピール

「困難な生活を見つめれば社会への問題意識を生み、反体制的な思想を受け入れやすくなる」。

1940年以降、日常生活をありのまま書く綴方教育にとりくんでいた教員らが、デッチ上げの治安維持法違反によって検挙される弾圧事件が起こります。全国で約300人、北海道でも約60人が逮捕されました。子どもたちを人間として尊重し、熱心に教えていた教師たちは、自身が逮捕された理由も分からず、拷問、長期の拘禁などで自白に追い込まれていきます。十勝郡・大津小学校に勤めていた横山真^{まこと}さんは、新婚2カ月目に検挙され、2年半もの長期勾留中に危篤状態となり、28歳の若さで亡くなりました。三浦綾子さんの小説『銃口』の題材にもなっています。

国体信仰に教育が利用された痛苦の歴史と反省から、1947年教育基本法において「教育は、不当な支配に服することなく、国民に対し直接に責任を負うべきものである」と定められました。しかし、公権力から教育を守るための支えとなっていた教育基本法は、2006年の第1次安倍政権によって改悪され、教育内容に行政が介入できる根拠が正当化されました。また、戦前の中央集権・国家主義的な教育行政を反省し、地方分権と民意の反映とした教育委員会制度も、2014年に地方教育行政法が改悪され、権力者による際限のない教育支配・介入に道を開く制度に改悪されました。

一方では、特定秘密保護法や安保法制の強行制定に止まらず、明文改憲や共謀罪制定も狙われている中、メディアへの強圧的な対応や報道への不当な介入がすすめられています。教育現場でも、自民党が「政治的中立を逸脱するような不適切な事例をいつ、どこで、だれが、何を、どのように行ったか」を報告するよう国民に求めたり、各地の議会や教育委員会などでも、教育の自由や教職員の政治的自由を奪う圧力がかけられています。治安維持法によって多様な意見が封じられ、第2次世界大戦へと突き進んだ道程を彷彿させるものです。

公権力による思想・良心、言論・表現の自由、教育の自由への攻撃は、内心の自由を保障することによって維持される民主主義社会の根底を大きく揺るがしています。圧力をかけられる前に自ら権力者の意向を忖度し、過剰に自主規制することも狙われています。三浦綾子さんは、自身が軍国主義教育に何の疑いも持たなかった教師体験の反省から、「昭和時代が終わっても、なお終わらぬものに目を外すことなく、生きつづけるものでありたい」とのメッセージを『銃口』に託しています。

敵意・疑い・威嚇…、様々な形で私たちに向けられている“銃口”。

憲法と民主主義を守るためには、それらの危険から目をそらすことなく、「おかしいことには、おかしい」と声を上げ続けなければなりません。子どもたちに平和な未来を引き継ぐためには、不当な圧力に屈せず、真実を伝えていかなければなりません。

若者や教え子を再び戦場に送らないため、憲法の価値を社会に根付かせていくため、子どもと教育を守るとりくみを、職場・地域から大きく広げていくことを心から呼びかけます。

2017年2月11日

2.11 子どもと教育を守る北海道集会